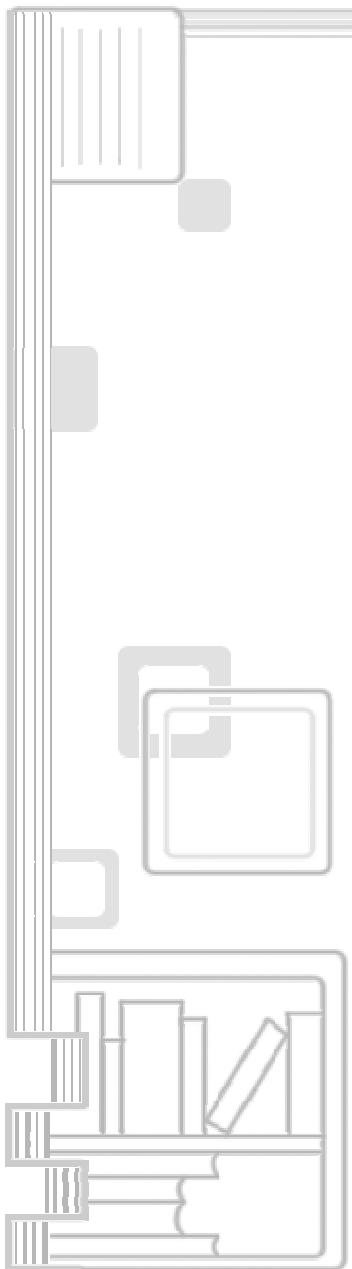


福島百合子 俳句集

• 福島百合子さん
• 昭和四年兵庫県淡路島生れ
• つくば市城山在住



福島百合子 俳句集

平成元年以前（その二）

筑波嶺の容ち定かに恵方道

柳の芽膨らみると分るほど

芽柳の触るる高さに笥の積まれ

朽ち船を取り巻き初めし蘆の角

花束を姑として受く春灯

風を読む宰領のゐて蛙を焼く

思いだしたるやうに畦火の焰あげ

ひとところ仁王立ちして野火猛る

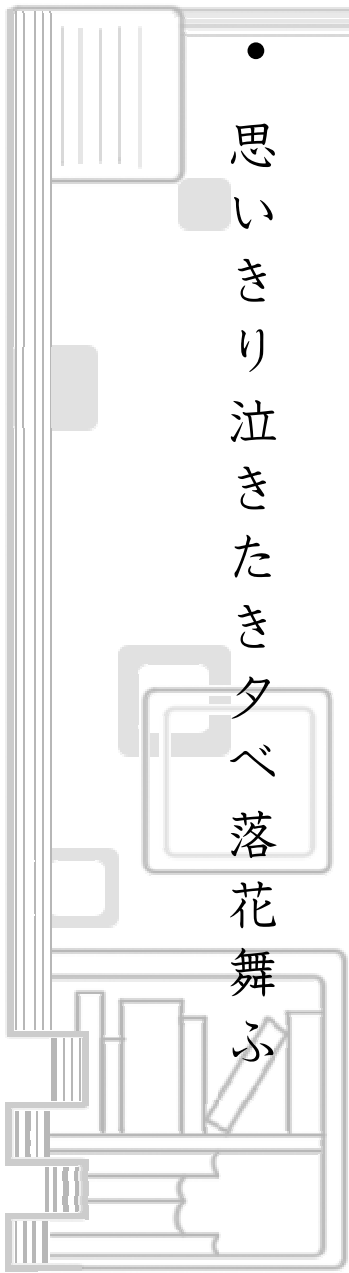
畦焼の人声遠くまで聞え

焰のちぎれ飛びては野火の猛りをり

福島百合子 俳句集

平成元年以前（その二）

- 蝌蚪生れてしまひし紐の漂える
- 片頬の濡れておはせる甘茶仏
- 動かぬと見てゐし蜷の動きけり
- それぞれの蜷それぞれの蜷の道
- 水底に日の届きをり蜷の道
- 直ぐなるはひとつとてなき蜷の道
- またひとつつ水面にとどく蜷の泡
- 引鴨と見えてしきりに羽搏ける
- 荒れ寺の仁王に慣れし雀の子
- 思いきり泣きたき夕べ落花舞ふ



福島百合子 俳句集

平成元年以前（その三）

一歩づつ猩々袴踏むまじく

試し飛びの子燕に沼広すぎる

子燕に今日の沼風やや荒し

夕風に簾をあげし漁師町

睡蓮に音立て山雨いたりけり

離れゐてひとかたまりの黄睡蓮

行々子あたり窺ふやうに鳴き

操られゐて囀鮎さかのぼる

外灯の届かぬあたり河鹿鳴く

華やぐとなけれど盛り山紫陽花



福島百合子 俳句集

平成元年以前（その四）

- 釣宿を風吹き抜ける鳳仙花
- 吹き満ちて泡立草にある翳り
- 葛の花仰ぎし空の青さかな
- 浜菊の崖に縋りて盛りなる
- 車前草を踏むほかなき径かな
- 昼の虫聴きとめてより絶え間なき
- 稻雀後れて翔ちし二三かな
- 干瓢を簾乾しせる匂ひかな
- 干瓢の乾きて来る縋りの見え
- 虫鳴くと一と声夫のこぼしけり

福島百合子 俳句集

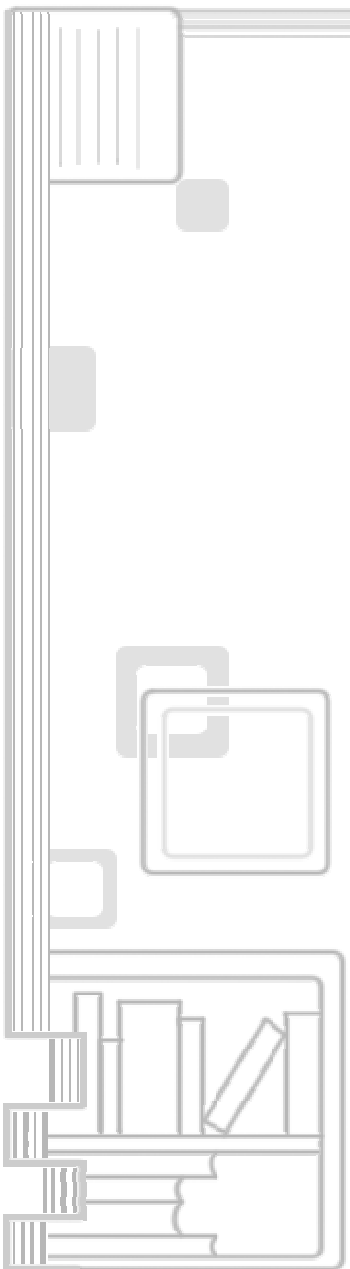
平成元年以前（その五）

- 呼べばすぐ応へる人のゐて夜長
- おほかたは女弟子なり獺祭忌
- 糸瓜忌や傘さしかける女弟子
- 赤蜻蛉自在にとびて群を出ず
- 牛小屋の二階に積める今年藁
- 枯蘆のただ一色の広さかな
- 一声の気になる日なり寒鴉
- 霜柱つぶやきながら崩れけり
- 川べりに古りし官舎の冬菜畑
- 菰巻の結ひ目きりりと立ち揃ふ

福島百合子 俳句集

平成元年以前（その六）

- 被せ藁にはなびら触るる寒牡丹
- 寒牡丹崩るる瀬戸を耐へてをり
- 乃木邸の桜落葉を急ぐなる
- 凧の水面を打ちて突っ走る
- 笹鳴をうなづき合ひて聞きをりぬ
- 書き込めるメモなつかしき古暦



福島百合子 俳句集

平成二年〜六年（その一）

- そこここに焚火を育て初日待つ
- 濤音の昂りて来し初日の出
- 飾竹立てて漁船のゐならべる
- 初糶の水ほとばしる魚市場
- 消えかかりをりし畦火の走り出す
- 土提を焼く焰の舌のちぎれ飛び
- 一筋の芝火走りしあととどめ
- 魎用意ならん青竹横たはり
- 魎を挿す舟のはるかに雨けむり
- 遠けれど魎挿すさまのはかどれる



福島百合子 俳句集

平成二年〜六年（その二）

- 御眼いま開くとも見ゆ涅槃像
- 涅槃図の嘆きのさまの仔細かな
- 一羽落ち一羽の揚る雲雀かな
- 蹲る影の中にも犬ふぐり
- 遠目にも畦塗らしき身のこなし
- 畦塗の踏み固めをる鼠穴
- 揉み合へる子猫の数を確かめし
- 親猫の離れてをりて見守れる
- 薄氷の煌くところどころかな
- 渡舟待つ人に雲雀の揚りけり

福島百合子 俳句集

平成二年〜六年（その三）

- のどけさや二人の客に渡舟出て
- 野蒜摘み渡舟の客となりゐたり
- 数なさねども乗込みの鮎のさま
- 乗込鮎水草乱して消えにけり
- 乗込み鮎上を下へと揉み合へる
- 乗込みの鮎の揉み合ふ水飛沫
- 山葵沢にも花どきは蝶の来て
- 眼の窪をとどめてをりし蛇の衣
- 青胡桃仰ぎてをれば見えて来し
- 手甲の汗まみれなる真菰刈

福島百合子 俳句集

平成二年～六年（その四）

- 真菰刈地べたに座り休みをり
- 黒揚羽纏れ合ひては迫り上り
- 草取女話の尽きることのなく
- 軽鳧の子の飛び込みざまに潜きけり
- 覚めやらぬ籠の鶺鴒にさす大西日
- 鶺鴒飼見の舟に揃ひの宿浴衣
- 鶺鴒箒を揺すぶり薪を継ぎ足せる
- 天草の打ち上げられて嵩なせる
- これよりは手漕ぎとなりし蓮見舟
- 舷に触れんばかりの蓮の花

福島百合子 俳句集

平成二年〜六年（その五）

- ひとくさり啼きて葭切翔ちにけり
- とびとびにして一面の花浅沙
- 丈なして揺れ揃ひたる柳蘭
- 抱へ来し包みに覗く苧殻かな
- 胴長に作り真菰の馬と牛
- 足さばき決まりておわら風の盆
- 踊り子のうなじの細き綾藺笠
- 縁台に二階に風の盆の客
- ひとときの視界展けし霧のひま
- 木の实一つ落ちたる音でありにけり

福島百合子 俳句集

平成二年～六年（その六）

- 兵備のさまに棒稲架並びをり
- 赤とんぼ影を離れて翔ちにけり
- いつとなく只中にゐし虫時雨
- 秋出水運河の街に居据われる
- 曼珠沙華見てゐて故国思ひゐし
- 枯色となりきつてゐる蝗跳ぶ
- 舗装路へ飛び出て蝗よろぼひし
- 田一枚占め菱喰雁のゐちらばり
- 菱喰雁の囁くやうに啼き交し
- 空見つめをりし岩場の檻の鷺

福島百合子 俳句集

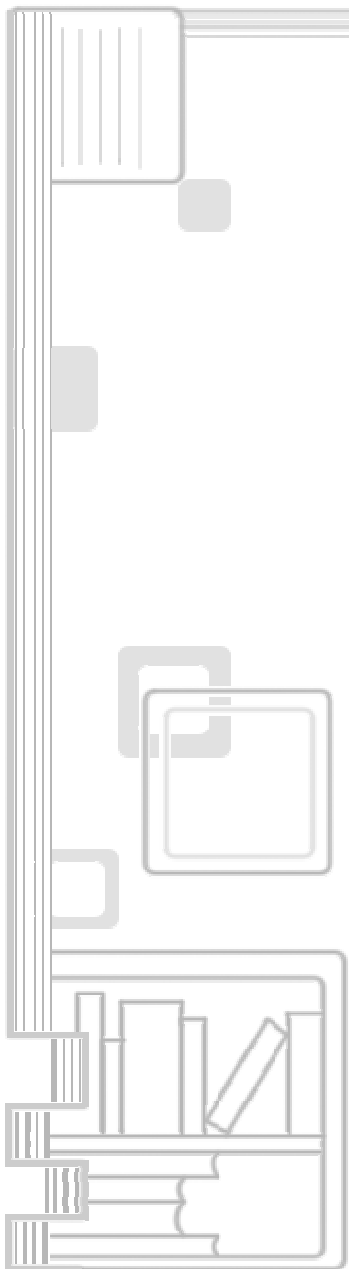
平成二年～六年（その七）

- 翔つとなき翼広げし檻の鷺
- 加へたる櫓に忽ち火の移り
- 櫓の火のときをり爆ぜる音のして
- 括られて直ぐなるはなし牡丹櫓
- 燃え立ちて火の粉吹き上ぐ牡丹焚
- 枯茨近寄り難き棘のさま
- 煤竹を伐り出す藪も寺領内
- 経唱へつつ御仏の煤払ふ
- なべ鶴の下り立つらしき脚づかひ
- 枯蠟螂身構へをれど動くなし

福島百合子 俳句集

平成二年～六年（その八）

- 綿虫の一つ二つと漂へる
- 蓮掘の動けば泥のつぶやける
- 黙々として蓮掘の捗れる
- ばらまきしさまに鴨ゐる遙かにも



福島百合子 俳句集

平成七年〜十年（その二）

- 飾竹立てて漁港に人を見ず
- 舳ひたる舳先舳先の飾竹
- 揚舟に供へてありし鏡餅
- またもとの一人となりし三日かな
- 薄氷のやうやく草を離しけり
- 手に乗せて座り確かめ雛飾る
- 灯ともりし雛の面輪の翳りかな
- 雛調度かくも微に入り細に入り
- 灯点せば威儀を正せる雛かな
- ときをりは波をかぶりて鹿尾菜刈る

福島百合子 俳句集

平成七年〜十年（その二）

- 礁一つ一人が占めて鹿尾菜刈る
- 飛沫つつ鹿尾菜の礁の現はれ来
- 風垣の海桐も花の頃にして
- 横たへて舟より長き若布刈棹
- ありなしの風にも飛んで柳絮なる
- 咲く花に雨の重さの加はりぬ
- 筍を掘る一鍬の狂ひなし
- 筍を掘りたる土のすぐ乾き
- 土地がらにしてこれほどの鯉幟
- ころほひの紫陽花寺の人出かな

福島百合子 俳句集

平成七年〜十年（その三）

- 暮れなづむ滝のいよいよ轟ける
- 滝音のほかにも音なかりけり
- 一条の白布となりて夜の滝
- 叢をなし勿忘草の華やげる
- たたみ皺まだ解けきらぬ牡丹かな
- 頃過ぎの白の褪せきし半夏生
- 幣つけて茅の輪作りの了りけり
- しつらへし茅の輪に雨の降り止まず
- 夕風に切幣舞ひて御禊果つ
- 土間暗く夕顔の実のころがれる

福島百合子 俳句集

平成七年〜十年（その四）

- 干瓢を干す手休めず応へくれ
- 揚花火終りと見ゆる続けざま
- 遙かにも鴨の渡りでありにけり
- 渡り来し鴨を加へし数ならん
- 初の三々五々と降り立ちし
- 椋鳥の群一樹に吸はれてしまひけり
- はからずも雲の切れ間の今日の月
- 雲脱ぎより煌々と今日の月
- 鱗雲端の一鱗まで定か
- 雁の飛び行く声でありにけり

福島百合子 俳句集

平成七年〜十年（その五）

- 乱れしと見れば つぎ つぎ 雁の降り
- 高原の秋は芒に如くはなし
- 溪々の紅葉にはまだ早やけれど
- 嶺々に霧かかり来て暮れかかり
- 築の鮭ごった返してをりにけり
- 魂棚に魂来給ふを疑はず
- 萎えかかりゐて瓜の馬茄子の牛
- ビルの影かむさりて来し生姜市
- 雨ぐせの雨のだらだら祭かな
- 干柿の日数の色のおのづから

福島百合子 俳句集

平成七年〜十年（その六）

- 初鴨の降り立つまでを見てをりし
- それぞれの水輪を寄せて鴨屯ろ
- がさ市の俄か帳場の吹きさらし
- 一望にして遠ち近ちの蓮根掘
- 真つ向に筑波嶺見ゆる蓮根掘る
- おもむろにゐざりて蓮根掘る
- たくましき椽の冬芽でありにけり
- 申しわけほどの寒紅梅咲けり
- 湯気あげてをるは寒天小屋と見ゆ
- 寒天のぶるんと揺れて干されけり

福島百合子 俳句集

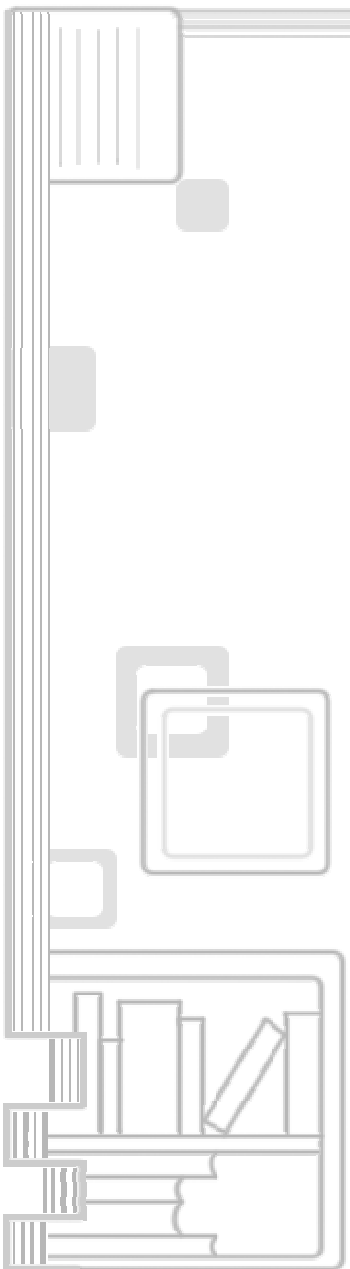
平成十一年〜十三年（その一）

- 恙なきことをめでなむ初鏡
- 底引網波止に繕ふ三日かな
- 初糶を待つ糶台の乾ききり
- 点りたるかまくらの灯に人行き来
- 出を待てる梵天衆に雪止まず
- 梵天の発つをうながす雪募り
- 引鶴のあれよあれよと遠ざかり
- 引鶴に一筋の道あるごとし
- 空めぐり引鶴群を整へし
- かみさんの指図で畦を焼きはじむ

福島百合子 俳句集

平成七年～十年（その七）

- 月光に寒凍つる音を立て
- この庭の数奇を凝らせる敷松葉
- 納め熊手みるみる積まれ三の酉
- 高張の上の織月三の酉



福島百合子 俳句集

平成十一年～十三年（その二）

- 渡し場の小旗を遠ちに青き踏む
- 雲雀野のいとも小さき渡舟小屋
- 渡舟待つ木椅子に草の芳しき
- いつまでも睡蓮に佇ちをられしを
- 空の色深め白木蓮咲き初むる
- 口揃へ鯉の寄り来る水温む
- 鬱々と真昼の牡丹ざくらかな
- 百二百三百薔薇を一望に
- 夏蠟梅一枝を挿して風生展
- 山内のそこそこ水の音涼し

福島百合子 俳句集

平成十一年～十三年（その三）

- 老鶯や隠岐の八十島見下しに
- 烏賊釣船戻り遠流の島暁けし
- 神鶏の一声暑気を払ひけり
- 萍の身動きならぬところかな
- 流れ出て萍はなればなれかな
- 片膝を立て菅笠の朝市女
- 襦宜の出て汀を祓ふ海開き
- 玉串の幣の吹き飛ぶ海開き
- 泳ぐほかなくて泳げり 四 鮎
- まだ濡れてゐず 鮎釣の腰の攲

福島百合子 俳句集

平成十一年〜十三年（その四）

- 筑波嶺のやうやく暮れし蛍狩
- 麗の灯遠くなりきし蛍飛ぶ
- 蛍火の落ちて点れる葎かな
- みんなのまた搔き立てる暑さかな
- 渡御筋の大提灯はからげられ
- 用水の豊かに迅し梅雨晴間
- 翡翠の背の色曳きて消えにけり
- 鯉船着きしばかりの活気かな
- 鯉船洗へる漁夫の土佐訛
- 最上川名もなき滝も一と眺め

福島百合子 俳句集

平成十一年〜十三年（その五）

- 初鴨といへばさうともいへる数
- 湖心へとまつすぐ漕ぎぬ月今宵
- この里の宿屋一軒地蔵盆
- 夜長の灯手許にあつめ木彫り村
- 秋冷といふも日ざしの侮れず
- 磐梯山の疵の深さを霧が消し
- 後じさりしては虻出て釣舟草
- 草叢をいくたび縫ひて水澄めり
- 岸釣にときをりしぶく日なりけり
- 一山の一画にして竹の春

福島百合子 俳句集

平成十一年〜十三年（その六）

- さはやかに杭の影置く水の秋
- ひまひまに水の耀ふ蘆の花
- をりからの日ざしの届き溪紅葉
- 火祭の幣新しき太郎杉
- 火祭の火に浮びたる御師の門
- 火祭の果てたる燠の嵩をなし
- 邯鄲を籠にもてなせる御師の宿
- 胡麻を干し昔飼屋の佇まひ
- 石仏の千草に埋れ在しける
- 会話ふと途切れてよりの夜寒かな

福島百合子 俳句集

平成十一年〜十三年（その七）

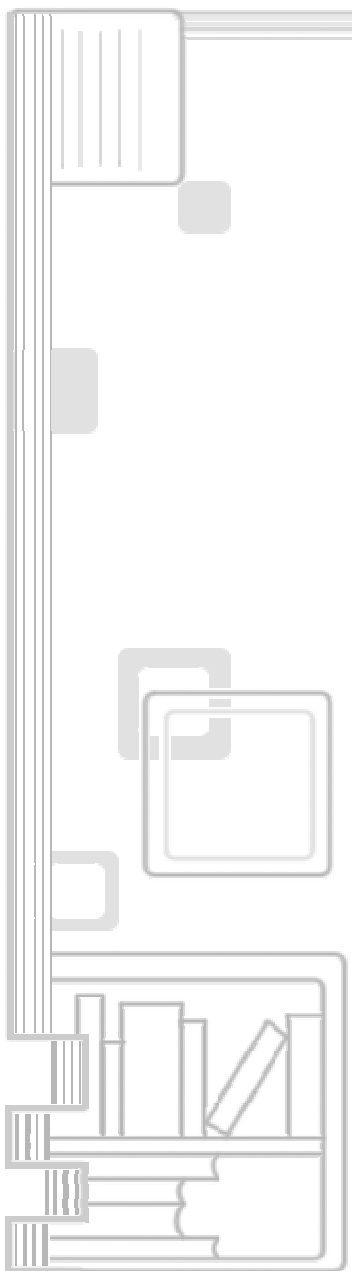
- 家康公裸にしたる菊師かな
- 家康公しばし菊師のなすがまま
- 菊人形農兵は足袋はかさねず
- いつよりの時雨かあたり濡れわたり
- 小さきは小さく鎧ひ冬芽かな
- 一枚の朴の落葉の水を堰き
- 鷹放つ空のにはかに引き締めまり
- 放たれし鷹の鈴鳴る深空かな
- 山峡の暑りやすき紙干場
- 雪窪に花を擡げし野水仙



福島百合子 俳句集

平成十一年～十三年（その八）

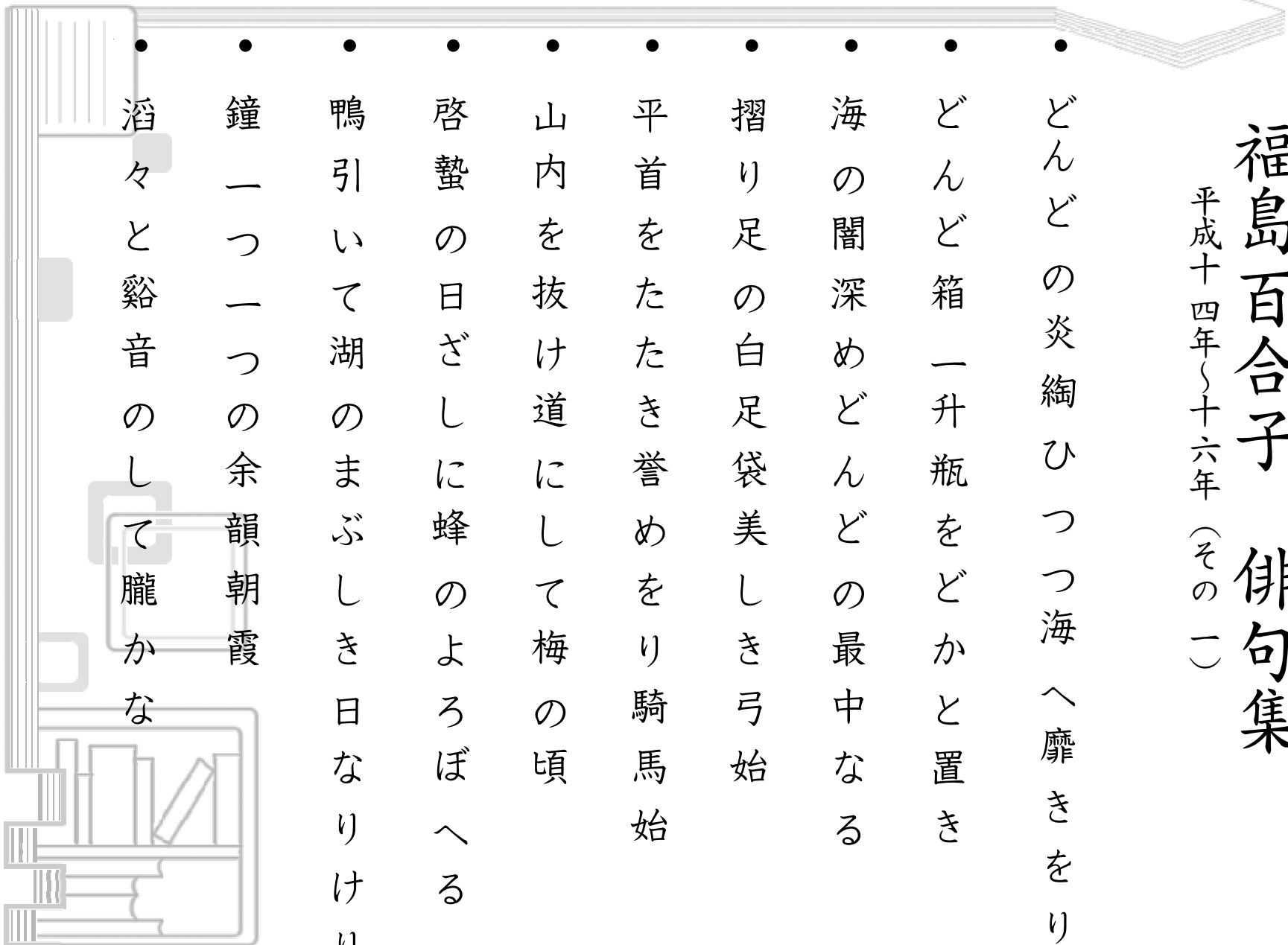
- 鴛鴦と分る遠さに見え隠れ
- がさ市に老いて焜炉の守り役



福島百合子 俳句集

平成十四年～十六年（その二）

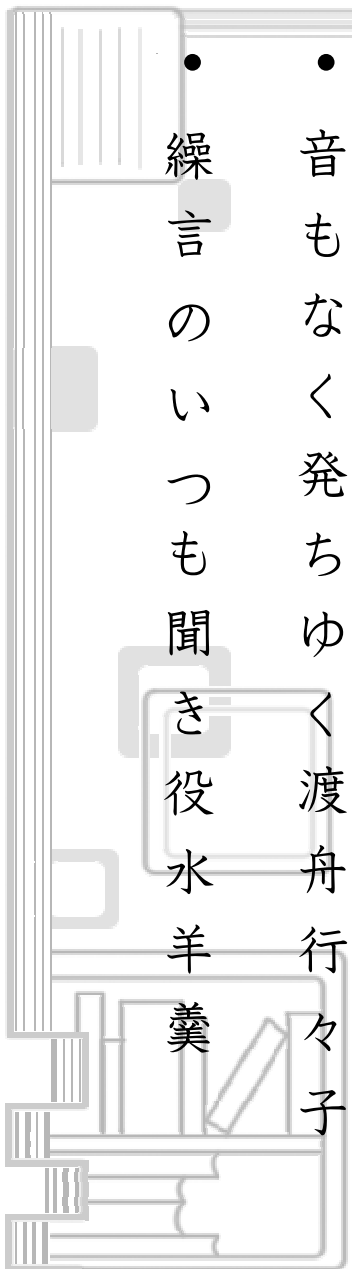
- どんどの炎絢ひつつ海へ靡きをり
- どんど箱一升瓶をどかと置き
- 海の闇深めどんどの最中なる
- 摺り足の白足袋美しき弓始
- 平首をたたき誉めをり騎馬始
- 山内を抜け道にして梅の頃
- 啓蟄の日ざしに蜂のよろぼへる
- 鴨引いて湖のまぶしき日なりけり
- 鐘一つ一つの余韻朝霞
- 滔々と谿音のして朧かな



福島百合子 俳句集

平成十四年～十六年（その二）

- 店先に背負籠並べて種物屋
- 連翹の思ひきり芻ね屋敷畑
- 草餅や虚子を語りて相親し
- やうやくに皆に見えし揚雲雀
- 噴水の光となりて弾け合ふ
- 聖五月白薔薇を壺に溢れしめ
- 原爆の地に隆々と楠若葉
- 歌垣の郷にうぐいす老いを鳴く
- 音もなく発ちゆく渡舟行々子
- 繰言のいつも聞き役水羊羹



福島百合子 俳句集

平成十四年～十六年（その三）

- 一振りの手練れの麻鎌捌きかな
- 朝霧をふりかぶりつつ麻を刈る
- 青蘆に馴染みてをりぬ捨て小舟
- 藻の花にいよいよ水の幽きかな
- 魚屋も菖蒲を咲かせ潮来なる
- 一粒の雨もとどめず巻葉かな
- ほととぎす鳴いて嬬歌の郷暁けし
- 斎竹の幣揺れて来し薪能
- 羅をゆるく着こなし能の夜
- 火口湖のまたもや霧の海と化し

福島百合子 俳句集

平成十四年～十六年（その四）

- 霧はれて綿菅の白浮び来し
- 虫の音やもう繕はぬ登り窯
- 轆轤場の土間の凹凸ちちろ鳴く
- 虫すだく置行灯に灯の点り
- 老導師所作おもむろに菊供養
- 菊供養今し始まる法鼓かな
- 仲見世を戻る供養の菊を抱き
- 虎杖の熔岩に這ひずり末枯るる
- 緇飛んで飛んで暮れ来し波浮港
- 着せ替へ中」と標して菊師見当らず

福島百合子 俳句集

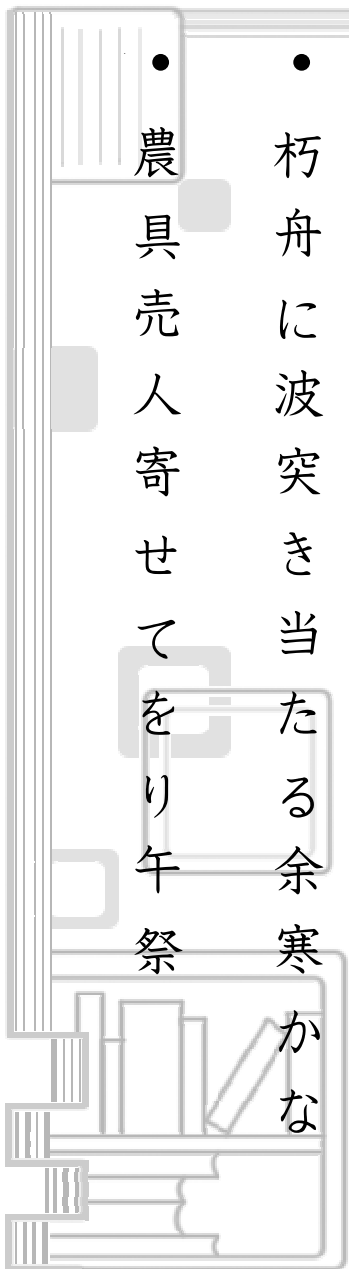
平成十四年～十六年（その五）

- 蹠の見ゆるまで鴨近づき来
- 思ひきり膨れ虎河豚せられけり
- 寒鯉ともなれず豊かに水流れ
- あちここに蓮掘の出て年つまる
- 蓮を掘る筑波全容見通しに
- あぎとうてゐし公魚の凍てにけり
- 水上の公魚ほのと紅させる
- 公魚釣小屋少し開け応へをり
- ぼろ市の古着に埋もれ古着売る
- 蠟梅の一輪だけの日向かな

福島百合子 俳句集

平成十七年～十九年（その二）

- 流木を夜つびて焚きて初日待つ
- 飛ぶ鳥の影濃くなりし初明り
- 飾竹ひしめき漁港しづもれる
- 十方を一瞬暗め初日の出
- 大川に旗を靡かせ初荷船
- 鬼やらひ了へたる闇の深さかな
- 早梅の一花のかがよへる
- 竜登るさまに連凧空にあり
- 朽舟に波突き当たる余寒かな
- 農具売人寄せてをり午祭



福島百合子 俳句集

平成十七年～十九年（その二）

- 白梅の幹くろぐろと雨上る
- 雨あとの日ざし耀ふ青き踏む
- 積み上げし漁具の隙に芽ぐむもの
- 谷中村滅びし標べ蘆の角
- がうがうと葎焼く音の走りけり
- 葎焼の空を暗めしけむりかな
- 竹箒片手に畦火見守れる
- 野火の屑泛べて逆さ筑波かな
- 山羊小屋の傾いてゐる桃の花
- 波音にとぎるる祝詞雛流し

福島百合子 俳句集

平成十七年～平成十九年 その三

- 轉や禰宜の草履の揃へあり
- 潮引きて海苔の岩肌耀へる
- 空の色海の色変へ春疾風
- お松明回廊駆けし跡しるく
- 飛鳥路にまだ耕人の姿見ず
- 警蹕に静まり返りおきまつり
- 一對の蠟燭朱きおきまつり
- 延々と論語を講ずおきまつり
- 豊かなる流れに浴ひて杏花村
- 積み上げし剪定の枝に杏咲く

福島百合子 俳句集

平成十四年～二十年（その四）

- 残雪の山を遠くに代田搔く
- 幹裂けてゐて確かなる芽吹きかな
- 新緑の谿に捨て湯の匂ひかな
- 濃く淡く虹生み暴れ滝なりし
- 涼しさや七堂伽藍俯瞰して
- 除幕待つばかりの句碑に緑さす
- 新しき句碑に華やぐ稚児あやめ
- 黒鯛釣と乗り合はせたる島渡舟
- 蘆茂り今は潰えし小棧橋
- 黒揚羽高きに誘ひ合歡の花

福島百合子 俳句集

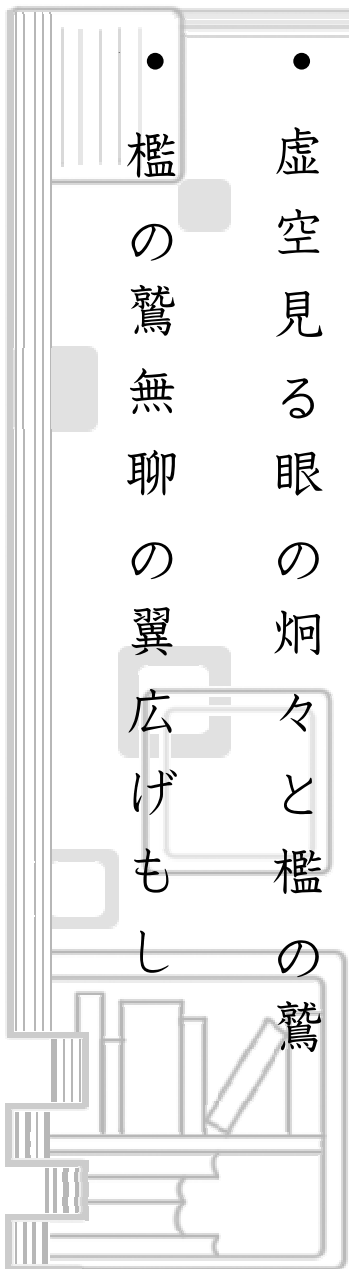
平成十四年～二十年（その五）

- その上のまたその上の葛の花
- 威し銃札所詣でを驚かす
- 手に触るるほどに飛び交ひ赤とんぼ
- 大文字の火を待つ空の晴れ渡り
- 終畢を飾りて左大文字
- 山畑の起伏のなりに蕎麦の花
- 水草を梳きゆく流れ澄にけり
- 屋敷神傾き在す竹の春
- 潮風のときをり荒し蘆の花
- 暁闇の湖すれすれに鴨渡る

福島百合子 俳句集

平成十四年～二十年（その六）

- 稲刈機ぽつんと残り刈田暮れ
- しぐれては日のこぼれては近江富士
- 巴塚より木曾殿へ雪螢
- 初雪の比良を仰ぎて旅果つる
- 山と積みひとつひとつの牡蠣を剥く
- ぎつしりと寺の窟に年木積み
- 能の夜を雪の月山見そなはす
- 王祇祭頭屋を勤む巻頭巾
- 虚空見る眼の炯々と檻の鷺
- 檻の鷺無聊の翼広げもし



福島百合子 俳句集

平成十四年～二十年（その七）

- 漁具高く波止に積み上げ大晦日
- 泊船の汽笛加はる除夜の鐘

